様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６７３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2016
課題番号：２４７３０５９８

研究課題名（和文）海外日本人留学生の心理的健康とアイデンティティの関連

研究課題名（英文）Mental health and Identity of Japanese living abroad

研究代表者
植松　晃子（Uematsu, Akiko）

ルーテル学院大学・総合人間学部・准教授

研究者番号：９０６１４６９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、自我アイデンティティと集団アイデンティティの一側面である民族アイデンティティの関係を中心に、青年期の自我アイデンティティが異文化接触によってどのような影響を受けるのかを明らかにする。そのために、青年期に該当する留学生群を他の海外滞在群、および国内学生群と比較した。他の海外滞在群とは、発達段階の異なる「成人期渡航者群」および親の都合で海外滞在を経験する「帰国子女群」である。異文化接触は、自我アイデンティティ発達における「危機」となり、発達促進的である一方、リスクも生むことが示唆された。特に縦断調査の比較からは、青年群が成人群に比べ海外での異文化接触のインパクトを受ける可能性が示された。

研究成果の概要（英文）：The puroose of this research is to explore the influence of ego identity by cross-cultural contact for Japanese adolescents, centering on the relationship between ego identity and ethnic identity as one aspect of group identity. For this purpose, the group of Japanese students abroad was compared with other group of Japanese residens abroad who are "a group of adulthood" and "a group of returning students", and also compared with adolescents living in Japan. As a result, cross-cultural contact would become a "crisis" in the development of ego identity, suggesting that it would also be developmentally promotional factors , but risks of identity diffusion. Especially from the longitudinal study conducted on adolescent group and adulthood group, it was shown that adolescents may be impacted by cross-cultural contacts in overseas compared to adulthoods.

研究分野：発達心理学、臨床心理学

キーワード：異文化接触　自我アイデンティティ　民族アイデンティティ　縦断調査　比較研究

１．研究開始当初の背景

異文化間交流によって人材を育成する試みに改めて注目が集まっている。一方で民族的背景を含む集団間の軋轢が様々な形で問題にもなっている。近年では多文化間で生きるサードカルチャーキッズの存在も知られるようになってきた。しかし日本人にとって異文化接触が持つ成長可能性やリスクは、まだ十分に検討されているとはいえない。

異文化接触時の心理は，これまで異文化適応の観点から幅広く論じられてきた。母国を離れた者が，滞在先で上手く生活していくことに付きまとう「適応」の問題には，生活習慣レベルの外的な適応プロセスだけでなく，より心理内的なプロセスの存在が指摘されている。その一つが自我アイデンティティ（ego identity）の問題である。自我アイデンティティは，自我心理学の流れをくむ E.H.Erikson によって、心理臨床的及び発達課題としての概念の提唱された。そこでは所属する集団への同一化によって得られる集団アイデンティティ（group identity）が自我アイデンティティと相互補完的な関係を持つものとされる（e.g, Erikson, 1959）。

これまで日本人留学生を対象に，集団アイデンティティと自我アイデンティティの関連について検討を行っているが（植松, 2010）、特に民族アイデンティティに焦点を当て，留学前と留学後のインタビュー調査（植松, 2009）や，国内在住の日本人青年と日本人留学生の間の比較調査（植松, 2010）を行い、異文化では集団アイデンティティの一側面として顕在化することが分かった。また，自分の民族性を探索し明確にすることは，異文化での自我アイデンティティを支えることが示された（植松, 2010）。

社会心理学の領域では，自己の不確定性が，社会的アイデンティティの明確化に影響しているという知見があり，新しい集団への加入（例えば，留学）などによって，自己を反映するものが不確定であるほど，個人の既存のカテゴリー（例えば「日本人としての自分」）により強く同一視すると指摘されている(Hogg, 2007)。民族アイデンティティは心理的健康及び自我アイデンティティを支える一方で，マイノリティとしては社会的不適応を伴う排他的なナショナリズムにも通じる概念として，その様相を捉える必要があると思われる。

当初は、青年期留学群の大規模な縦断調査を実施する予定であったが、調査依頼先の都合が変わったこともあり実現が難しかった。したがって計画は変更したが、方針は変更せず、自我アイデンティティ確立が発達課題となる青年期の日本人留学生の特徴をさらに明らかにすることで、青年期の異文化接触の心理的影響について検討することとした。

そのために植松（2010）の執筆にも使用した過去のの調査データも用い、再分析することとした。そして他の海外滞在群、すなわち成人期の海外渡航者群および帰国子女青年群、さらに国内学生群との違いを見る。特に成人期渡航群に対しては、1 年に渡る縦断調査を行い、異文化接触のインパクトが青年期留学群とどのように異なるのかを明らかにする。

２．研究の目的

本研究の主な目的は、青年期の自我アイデンティティが異文化接触によってどのような影響を受けるのかを明らかにするために、他の海外滞在群、および国内学生群と比較することである。他の海外滞在群とは、発達段階の異なる「成人期渡航者群」と「帰国子女群」である。

３．研究の方法

全ての調査対象者に、植松（2010）が日本人留学生に実施したものと同じ質問紙とインタビューを実施した。以下に各研究の概要および質問紙やインタビューの内容を示す。

○調査概要

【研究 1】帰国子女群との比較研究

2013 年 7 月～2015 年 1 月に帰国子女経験のある 20 代大学生 21 名（男性 4 名、女性 17 名）に質問紙とインタビュー調査を実施した。平均年齢は 19.6 才（*SD*=.91）である。

【研究 2】国内学生のインタビュー調査

2014 年 6 月～2015 年 2 月に 3 ヶ月以上の海外滞在経験のない国内学生 20 代大学生 24 名（男性 9 名、女性 15 名）に調査を実施した。平均年齢は 20.4 才（*SD*=1.58）である。

【研究 3】縦断調査による成人期渡航群との比較研究

2015 年 3 月～2017 年 3 月に 33 名（男性 14 名、女性 19 名）を対象に、縦断調査として海外渡航 1 カ月目、3 カ月目、6 カ月目、12 年（range: 9 か月～12 か月）時点で調査を実施した。平均年齢は 34.0 才（*SD*=.5.38）である。渡航開始時期に個人差があり、また縦断調査は現在も継続中である。2017 年 6 月時点で 12 カ月の滞在を終えているのは 14 名である。

また青年期留学群についても、植松（2010）の縦断調査に追加する形で 2013～2015 年にかけて 5 名（男性 3 名、女性 2 名）の約 1 年の交換留学生に同様の縦断調査を行った。よって計 30 名の青年期留学群（平均年齢 20.4 才（SD=.77））のデータと成人期渡航群のデータを比較し、各群の自我アイデンティティ及び民族アイデンティティの時期による変化や、要因間の関係の変化の特徴を明らかにする。

○質問紙の内容

（1）自我アイデンティティ尺度として谷（2001）の多元的自我同一性尺度を用いた。「斉一性・連続性」、「対自」、「対他」、「心理社会」の 4 つの下位因子で構成される。20 項目、7 件法である。

（2）民族アイデンティティ尺度として Phinney（1992）による「Multigroup Ethnic Identity Measure」を翻訳、改編、標準化し

た尺度（植松, 2010）を用いた。「探索」、「愛着･所属感」の 2 つの下位因子で構成される。10 項目 4 件法である。

（3）異文化適応感尺度として植松（2010）の作成した尺度を用いた。「滞在国の言語理解」、「学生生活」、「心身の健康」、「ホスト親和」の 4 つの下位因子を持つ。なお、成人群には「学生生活」を仕事や研究などに置き換えて用いた。また国内学生および帰国子女については、このうち「学生生活」、「心身の健康」の下位尺度を実施した。21 項目、4 件法である。

○インタビュー内容

民族アイデンティティ尺度の構成要因である「探索」と「愛着・所属感」のあり方が検討できるよう植松(2010)が Phinney(1992) および Phinney and Org, 2008）を参考にした。それぞれ所属感「自分が日本人であると意識していますか、それはどういう場面ですか」、愛着「日本人であることに愛着・誇りはありますか、それはどのようなものですか」、探索経験「日本や日本人ついて知ろうとしたり学んだことはありますか」という質問項目を中心に半構造化面接を行った。他に現在の生活の充実度や自我アイデンティティのあり方についても、質問紙調査の補足として尋ねている。

４．研究成果

【研究 1】帰国子女群との比較研究

帰国子女群に実施した調査結果を、青年期留学群および国内学生群に対して実施した植松（2010）による調査のデータと比較した（留学群 265 名(平均年齢 25.8 才(*SD*=5.13)、平均滞在期間 33.6 ヶ月（*SD*=30.9）/国内学生群 335 名（平均年齢 20.9 才（*SD*=1.49））。

（1）自我アイデンティティ得点

自我アイデンティティ尺度の下位因子ごとに尺度得点を作成し、留学群、帰国子女群、国内学生群 3 群間による一元配置分散分析を行った。「斉一性・連続性」、「対自」、「心理社会」の下位尺度において留学生群が最も高い値を示した。「対他的アイデンティティ」の側面においては留学生群と帰国子女群が国内学生群よりも有意に高い値を示した（表 1、図 1)。

自我アイデンティティのあり方として、得点からは帰国子女群は留学生群と国内学生群の間に位置していることが分かる。帰国子女群へのインタビューにおいては、「逆に日本に帰ってきたときの方が、私誰なんだろうみたいな、日本人でもないし、でも日本人なんだけど（ID1)」という語りが示すように自分の所属感が揺らぐ経験をすることがある。帰国後は周囲から見た自分と自己観との一致・不一致には敏感になると思われ、他の側面についても、有意差はないが一貫して国内学生群より高い値なのは、こ国内学生群よりも主体的なアイデンティティ選択に繋がるのではないだろうか。

表1 3群による自我アイデンティティ下位尺度の分散分析結果

	留学生		帰国子女		国内学生		F値	η^2	多重比較
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*			(Tukey法)
連続性･斉一性	5.16	1.25	4.58	1.38	4.45	1.42	11.88***	.05	留>国
対自的	4.83	1.17	4.13	1.17	3.98	1.34	19.04***	.07	留>国
対他的	4.26	1.14	4.28	1.16	3.53	1.19	19.01***	.07	留, 帰> 国
心理社会的	4.98	.98	4.70	1.09	4.21	1.12	23.23***	.09	留>国

***p<.001

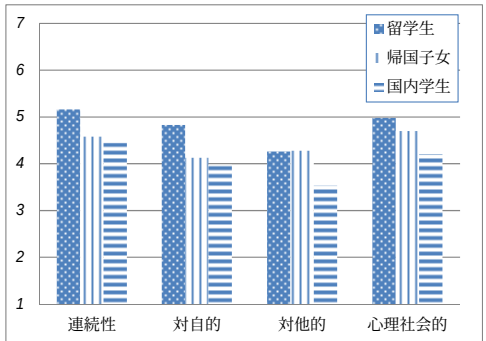

図1 3群ごとの自我アイデンティティ得点

（2）民族アイデンティティ得点

民族アイデンティティ尺度の下位因子ごとに尺度得点を作成し、3 群間の一元配置分散分析を行った。民族アイデンティティ「探索」のみで有意差が見られ、留学生群と帰国子女群は国内学生群に比べて優位に高かった。「愛着・所属感」においては 3 群に有意差は見られなかった（表 2、図 2)。

民族アイデンティティはすなわち「日本人としての自分」という集団アイデンティティの一側面を見ている。ここでいう「探索」とは Marcia（1966）の提案したアイデンティティ確立に至るプロセスで、自分の人生の重要な領域に積極的に関与しているかどうかを明らかにする視点である。異文化接触を経験する青年期留学群や帰国子女群の方が、自らが日本人であることに対して積極的に探索していることが示された。異文化接触が持つ心理的な成長の可能性も示唆されよう。

ただし、帰国子女群のインタビューにおいては、留学生および国内学生群のインタビュー（植松, 2010）では見られなかった民族アイデンティティの不安定さを述べるものがいた。例えば「何か、やっぱり自分はいつも、一つのところにずっと住んでた人が羨ましくて、ピットインする感じがどこへ行ってもしないんで。何か、居場所がないわけじゃないんですけど、どっしり座れないみたいな感じが。超ふわふわしていました、私は（ID5)」などである。

日本人留学生や国内学生にとっては表面的な属性（日本国籍）と日本で培われた内面の自己観は一致しているのに対し、帰国子女はそこにズレが生じることが示唆される。よって日本人留学生の民族性探索と、帰国子女のそれとは質的には異なり、それぞれの群における心理的サポートの仕方は異なるものになると思われる。

表2 3群による民族アイデンティティ下位尺度の分散分析結果

	留学生		帰国子女		国内学生		F値	η^2	多重比較
	Mean	*SD*	*Mean*	*SD*	*Mean*	*SD*			(Tukey法)
探索	2.78	.75	2.48	.81	2.33	.66	29.23***	.09	留, 帰>国
愛着･所属感	3.26	.63	3.19	.65	3.18	.57	1.22	.01	*n.s.*

***p<.001

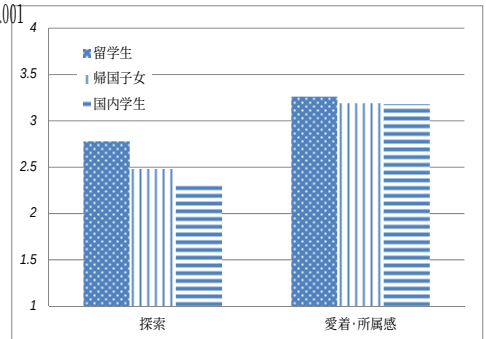

図2 3群ごとの民族アイデンティティ下位尺度得点

（3）群ごとの相関

自我アイデンティティと集団アイデンティティは相補的関係にあると仮定し（植松，2010)、3 群ごとに自我アイデンティティと民族アイデンティティの下位尺度ごとの相関を分析した。

①青年期留学群

自我アイデンティティ「対自」と「心理社会」と民族アイデンティティ「探索」に有意な正の相関がみられた（対自：r=.336, p<.001/心理社会：r=.209, p<.05)。自我アイデンティティ「斉一性・連続性」は民族アイデンティティ「愛着・所属感」と有意な負の相関がみられた（r=－.277, p<.01)。

青年期留学群において、「対自的アイデンティティ」の側面と、「心理社会的アイデンティティ」は、日本人としての自分への積極的関与を示す「探索」と相互に高め合う関連が見られた。また自らの民族性への所属感や愛着は、自我アイデンティティ「斉一性・連続性」に関連していた。異文化でのマイノリティ経験などで自尊感情が低下したり、所属感が揺らぎやすい留学生にとって、「日本人としての自分」を探索しまた肯定的に思えることは、自我アイデンティティを拡散させないよう支えるのではないだろうか。

②帰国子女群

自我アイデンティティ「斉一性・連続性」と「対自」と民族アイデンティティ「探索」に有意な正の相関がみられた（斉一性・連続性：r=.536, p<.05/対自：r=.649, p<.001)。また自我アイデンティティのうち「心理社会」は民族アイデンティティ「愛着・所属感」と有意な正の相関がみられた（r=.531, p<.05)。

帰国子女群において、自我アイデンティティの過去と現在の一貫性、統合性に関わる「斉一性・連続性」の側面と、「対自的アイデンティティ」の側面が民族アイデンティティ「探索」と相互に高め合う関係にあった。研究 1―（2）で述べたように、表面的な属性と内的な自己観とのズレを体験しやすい帰国子女群において、日本人としての自分を積極的に探索することは自我アイデンティティの統合感覚および自分の確かさを高める可能性のであろう。また「心理社会的」側面が民族アイデンティティ「愛着」と関連していたが、日本人としての自分を肯定的に捉えることは、日本に帰国しそこで適応的に自分らしくいられることに寄与するのであろう。

③国内学生群

自我アイデンティティ「対自」と「心理社会」が民族アイデンティティ「探索」と有意な正の相関がみられた（対自：r=.223, p<.001/心理社会：r=.155, p<.01)）。また「愛着」は全ての自我アイデンティティ下位因子と正の相関がみられた。

留学生と同様の自我アイデンティティの側面が民族アイデンティティ「探索」と関連していた。ただし相関係数はやや低くなる。また自我アイデンティティの全ての側面が、民族的アイデンティティ「愛着」と関連していることが分かった。国内学生にとっては、日本人であることを肯定的に捉える側面が、自己の生き方やその主体的選択に、他の群より強く関連しているといえよう。

【研究 2】国内学生のインタビュー調査

所属感、愛着、探索経験が共に低い「無検討」に分類されるものが 6 名、所属感や愛着はあるが探索経験のない「早期完了」は 8 名，所属感や愛着、また探索経験のある「モラトリアム」に分類されるものは 8 名であった。外国人や帰国子女の学生と接したり、友人にハーフの学生がいる、SNS で外国人と交流するなど生活場面で異文化接触をしていた学生が「モラトリアム群」に多かった。現在は国内でも異文化接触の場が多くなっており、探索の方法は間接的であったとしても、日本人としての自分への関心や積極的関与が増えていることが推測される。

【研究 3】縦断調査による成人期渡航群との比較研究

今回調査した成人期渡航群（33 名）と比較する青年期留学群は、植松（2010）の縦断調査（25 名）の調査データに新たに 5 名の追加調査のデータを合わせた計 30 名（平均年齢 20.4 才（SD=.77)）である。

（1）時期によるアイデンティティの推移

群ごとに反復測定による分散分析を行った。

①青年期留学群

A）自我アイデンティティの推移

「斉一性・連続性」の側面で時期による有意差が明らかになった（F(3, 75）=11.13, p<.001)。多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ、1 カ月目と 3 カ月目および 12 カ月目、3 カ月目と 6 カ月目、6 ヶ月目と 12 カ月目の間に 5%水準で有意差が見られた（図 3)。「対自的アイデンティティ」についても有意差が検出された（F(3, 75）=8.36, p<.001)。多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ、

3 カ月目と 6 ヶ月、6 ヶ月と 12 カ月目の間に 5%水準で有意差が見られた（図 4）。「対他的アイデンティティ」についても有意差が検出された（$F(3, 75)=8.36$, $p<.001$）ため、多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ 6 ヶ月と 12 カ月の間に 10%水準の有意差が見られた（図 5）。「心理社会的アイデンティティ」についても有意差が検出され（$F(3, 75)=11.21$, $p<.001$）。多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ、1 カ月目と 12 ヶ月、3 ケ月と 6 カ月目の間に 5%水準で有意差が見られた（図 6）。

B）民族アイデンティティの推移

「探索」の面は時期による有意差は検出されなかった（図 7）。「愛着・所属感」については、有意差が検出された（$F(3, 75)=2.99$, $p<.05$）ため、多重比較（Bonferroni 法）を行ったところ 1 ヶ月と 6 カ月の間に 5%水準の有意差が見られた（図 8）。

②成人期渡航群

この分析に用いるのは、2017 年 6 月時点で 12 か月の縦断調査を終えている 14 名とする。

A）自我アイデンティティの推移

全ての下位尺度で有意差は検出されなかった（図 3～図 6）。

B）民族アイデンティティの推移

全ての下位尺度で有意差は検出されなかった（図 7・図 8）。

青年期留学群と成人期渡航群の滞在時期ごとの推移の特徴が見出された。青年期留学群は 6 カ月目に自我アイデンティティの下位尺度得点が下がる傾向があるが、成人期渡航群は 1 年に渡りほぼ一貫した得点である。青年期よりも成人期のほうが安定していた。

また民族アイデンティティはどちらの群も「探索」は有意な変化がなく、成人期渡航群と比べると、青年期留学群の方が高いが、愛着・所属感は一貫して低い。青年期留学群の方が自らの民族性に関して積極的に関与していく傾向が高いと思われ、異文化接触の影響を受けやすいことが推察される。

（2）時期による尺度間の相関

青年期留学群と成人期渡航群において、時期ごとに自我アイデンティティと民族アイデンティティの相関の分析を行った。

①青年期渡航群　1 ヶ月時点では各要因の有意な相関は見られず, 3 ヶ月時点で民族 ID「探索」と自我 ID「心理社会」に負の相関の傾向, さらに民族 ID「愛着・所属感」と自我 ID「連続性」、「対他」、「心理社会」に有意な負の相関が見出された。しかし 6 ヶ月時点では, 民族 ID「探索」と自我 ID「対自」に有意な正の相関がみられ, 民族 ID「愛着・所属感」では自我 ID の「連続性」、「対自」、「心理社会」の間に有意な正の相関がみられた。また, 12 か月の時点では民族 ID「探索」と自我 ID「対他」に有意な負の相関がみられた。結果を表 3 から 6 に示す。

②成人期渡航群　4 時点において, 自我アイデンティティと民族アイデンティティのどの要因にも有意な相関は見出されなかった。

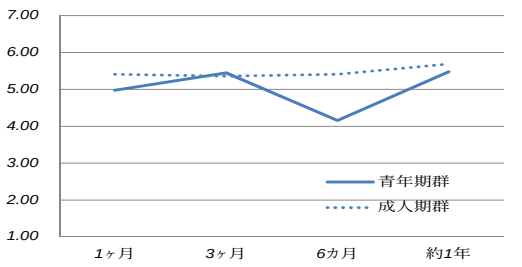

図3　自我アイデンティティ「斉一性･連続性」の推移

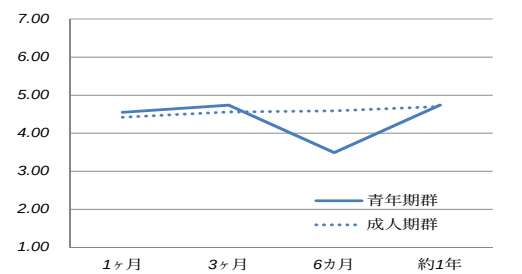

図4　自我アイデンティティ「対自」の推移

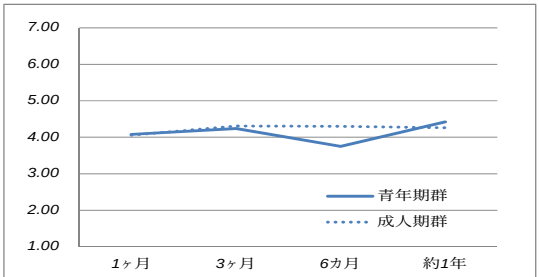

図5　自我アイデンティティ「対他」の推移

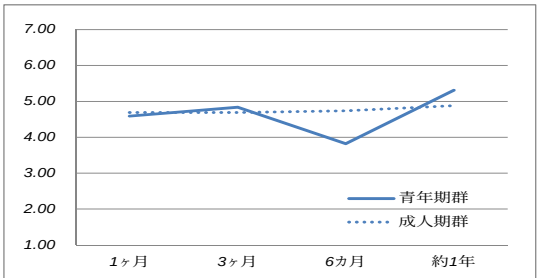

図6　自我アイデンティティ「心理社会」の推移

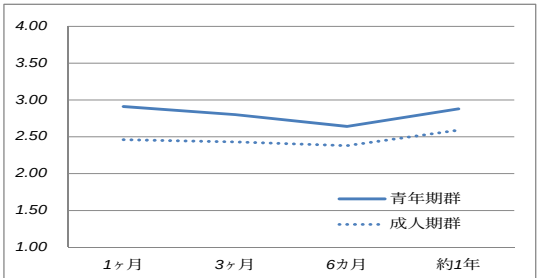

図7　民族アイデンティティ「探索」の推移

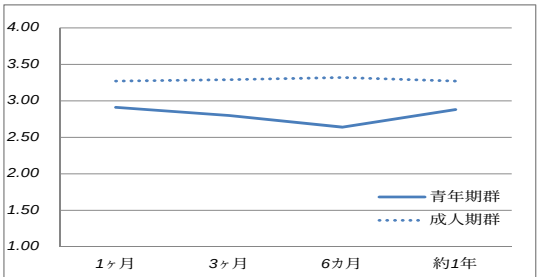

図8　民族アイデンティティ「愛着･所属感」の推移

成人期とは異なり青年期群では，特に，3ヶ月時点と6ヶ月時点で民族アイデンティティ「探索」,「愛着・所属感」と自我アイデンティティは負の相関から正の相関へと変化した。民族アイデンティティは初めは防衛的にであれ、自我アイデンティティの高さとは相反する動きをするが、6ヶ月時点では相互に補い合う Erikson（1959）の提案した自我アイデンティティと集団アイデンティティの関係を示すようになることが示唆される。

本研究では，青年期における異文化接触の心理的なインパクトを明らかにするために、成人期渡航群や国内に在住する青年期群（国内学生群）、さらに異文化接触の仕方が異なる帰国子女群と比較検討を行った。

異文化接触のインパクトとして、青年期においては留学および帰国子女群が、国内在住の青年よりも自我アイデンティティが高く、さらに民族アイデンティティ「探索」も高いことが明らかになった。青年期において自らの生き方や価値観を選択する際に「危機 crisis」という概念が重視される（Erikson, 1968）。異文化接触は、こうした「危機」の継起になるものであり、確かにそれは自我アイデンティティ拡散のリスクを含んではいるが、本研究で見出されたように積極的に自らの民族性を探究し、それが自我アイデンティティの側面と相互に関連し合うようになることからは、青年期の異文化接触は、自我の発達を促進するものとして位置づけることができるのではないだろうか。

本研究で縦断調査を成人期と比較しながら分析を追加したことにより、時期によって異なる要因間の関係が見出され、自我アイデンティティと、異文化接触によって顕在化する民族アイデンティティ（植松，2010）が、6カ月ごろから相補的な関係になると分かった。こうした関係は成人群にいは見出されなかったため、やはり青年期の方が異文化接触による民族アイデンティティの顕在化を体験しやすく、またそれが自我アイデンティティと関係し合うように変化することが推察できる。

さらに帰国子女のインタビュー調査からは、彼らが民族アイデンティティの側面で所属感の揺らぎを持ちやすいこと、すなわち自我アイデンティティを支える集団アイデンティティの不安を持ちやすいことが示唆された。属性は日本人であっても、ずっと日本で生活してきた日本人とは異なっているという思いが強ければ、自我アイデンティティ確立に葛藤を生みやすいと思われる。留学生とは異なる、青年期の異文化接触群として、彼らの心理的適応のあり方についても検討していく必要があるだろう。今後ますます増える異文化接触の機会を鑑み、青年期の心理的発達の要因および心理的サポートの要因をさらに検討していくことが必要である。

表3 青年期 自我アイデンティティと民族アイデンティティの相関(1ヶ月)

	自我アイデンティティ			
	斉一性･連続性	対自	対他	心理社会
民族アイデンティティ				
探索	.20	-.02	.04	.06
愛着･所属感	-.17	-.17	-.22	-.18

表4 青年期 自我アイデンティティと民族アイデンティティの相関(3カ月)

	自我アイデンティティ			
	斉一性･連続性	対自	対他	心理社会
民族アイデンティティ				
探索	-.29	-.11	-.26	-.33+
愛着･所属感	-.31+	-.24	-.40*	-.50**

+p<.10, *p<.05, **p<.01

表5 青年期 自我アイデンティティと民族アイデンティティの相関(6ヶ月)

	自我アイデンティティ			
	斉一性･連続性	対自	対他	心理社会
民族アイデンティティ				
探索	.25	.38*	.03	.28
愛着･所属感	.54**	.64***	.30	.45*

*p<.05, **p<.01, ***p<.001

表6 青年期 自我アイデンティティと民族アイデンティティの相関(約1年)

	自我アイデンティティ			
	斉一性･連続性	対自	対他	心理社会
民族アイデンティティ				
探索	-.14	.01	-.40*	-.19
愛着･所属感	.05	-.15	-.11	-.13

*p<.05

5．主な発表論文等

〔学会発表〕（計5件）

①植松晃子、日本人海外渡航者における滞在時期ごとの自我アイデンティティと集団アイデンティティの関係、第81回日本心理学会大会、2017.9（予定）、福岡県.

②鈴木一代・小林亮・具英姫・植松晃子、外国につながる人々の「居場所」をめぐって、第81回日本心理学会大会（公開シンポジウム）、2017.9（予定）、福岡県.

③植松晃子（日本人青年に関するコメンテーター・情報提供者）「中国の青少年は何に悩んでいるのか」国際交流基金講演会，講演者 李樺，司会　阿古智子，2015.1.28. 東京.

④ Akiko UEMATSU, The relationship between ethnic identity and ego identity in cross-cultural situation: with Japanese students abroad, 16th European Conference on Developmental Psychology, 2013.9.4., Lausanne, Switzerland.

⑤ Akiko UEMATSU, How does ethnic identity change in cross-cultural situation?, International Societiy for the Study of Behavioral Development 22nd Biennal Meeting, 2012.7.6., Edmonton, Canada.

6．研究組織

(1)研究代表者

植松　晃子（UEMATSU，Akiko）
ルーテル学院大学・総合人間学部・准教授
研究者番号：9061694